

猫の夢

首都近郊のベッドタウン、駅のターミナルの脇に連なる植え込みの一角に、数匹の猫がじゃれあっていた。

白猫に黒猫、三毛にブチ、そして茶トラという面々だ。

いや、正確にはじゃれあっているのではない。

植え込みの傍らに立つおばさんに惹かれて、どこからともなく集まってきたのだ。

「みんな今日も変わらないね。さあ、いっぱいおあがり」

おばさんはいつものように、肩からぶら下げたバッグの中から猫用のペットの餌を詰めた袋と、100円ショップで売っていきそうな少々大きめの皿を取り出し、皿の上に適当に餌を盛ると植え込みの脇にそっと置いた。

おばさんがこの植え込みで野良猫達に餌を与える様になって、そろそろ一年が経つ。

この町に住み着いて以降、おばさんは日課として二時間程のウォーキングを欠かした事がなかった。

一年程前、ウォーキングで駅前を通りかかった時に、偶然二人の女子高生がこの場所で猫の子に餌を与えていた所を見かけた。

その時は猫の事など余り気にかけてはいなかったのだが、それから一週間程して再びこの植え込みの脇を通りかかった時に、か細い声で鳴き続ける子猫を見つけ、そのまま放置してもおけずに餌を買い与えてやった事が発端だ。

その時の子猫はいつの間にか姿を見せなくなってしまったが、以降これまでの間に一匹、二匹と新しい顔が姿を見せるようになり、今ではちょっとした大所帯となっていたのだ。

「それにしても、茶トラはどうしてこう人懐っこいのかねえ」

おばさんが植え込みの傍らに膝を折って、猫達の食事風景をしげしげと眺めていると、茶トラは必ずといって良い程おばさんの足元にじゃれ付いてくる。

「この子は多分家猫だったんだろうねえ。可哀想に……」

おばさんはしばらくの間茶トラの好きな様にさせていたが、決して自分から手を出したり、ましてや抱え上げたりといったより積極的なアプローチは慎んでいた。

幾ら一見可愛いとは言っても、野良猫はどの様な病原菌を抱えているか分からなかったし、下手に手を出して引っかけられたり噛まれたりして、それが原因で何らかの病気に感染しても困るからだ。

そうになってしまえば、こうして毎日餌をやりに来てやる事さえ不可能になるかもしれない。

ましてや、万一茶トラがおばさんに対して家猫同様に気を許してしまっても、おばさんは茶トラを引き取る事が出来なかったし、そこまで無防備になってしまうと茶トラの生命が危険に晒される可能性があった。

だから、おばさんは茶トラを始めここに集まる猫達に対しては、「毎日餌を与えるおばさん」としてだけの付き合いにしようと、自ら一定の距離を置く様に心掛けていた。

その様な事情があったから尚の事、野良猫としては度の過ぎる人懐っこさを不憫に感じてもいた。

「あ、やっぱりぬこたんいた。かわゆーい」

いつの間にか、おばさんの傍らに一人の女子高生がいた。

おばさんもこの二〜三ヶ月のうちに何度か見かけた記憶のある子だ。

その制服から、近隣でも少々名の通ったお嬢様女子高の生徒だという事が一目で分かる……といっても、この寒空の下ではさすがにコートを羽織ってはいたが。

女子高生も、おばさんが毎日猫に餌をあげている事を知っていたが、まるでお互いの了解事項であるとも言った風に、どちらからとも話し掛けようとはしなかった。

そして、おばさんは猫が餌を食べ終えた事を確認すると、餌を入れていた皿を回収しつつ、無言のまま女子高生に軽く会釈して立ち去った。

まるでおばさんが立ち去るのを待っていたかの様に、猫達も三々五々植え込みの奥に紛れたり、又は歩道沿いに次の餌場へと姿を消していったが、茶トラだけはその場に留まり、今度は膝を折っている女子高生の足元でじゃれ付いている。

「やっぱりチャトランに懐かれちゃったみたい……ねえ、一緒にお家来る？」

女子高生が抱きかかえるが、茶トラはいかにも気持ちがいい、居心地が良いとばかりに大人しく女子高生のされるがままに任せている。

「んー、そしたら、お家行ってママにお願いしてみようね」

女子高生は、茶トラを抱えたまま駅前の雑踏の中に消えた。

＊

翌日、おばさんがいつもの時間にいつもの植え込みの一角に現れると、案の定いつもの様に白、黒、三毛、ブチ、そして茶トラがいつもの餌を待ち構えていた。

おばさんはいつものように「みんな今日も変わらないね。さあ、いっぱいおあがり」と、植え込みの一角にいつもと同じ猫用のペットフードを盛った皿を置くと、猫達は飽きもせず昨日と同じ餌を黙々と胃に詰め込んでいく。

ある程度胃が膨らむと、やはりこれもいつもと同じ様に、茶トラが膝を折って猫達の食事風景を見ているおばさんの足元にじゃれ付いてくる。

しかし、何となく今日の茶トラはいつもにも増して密着して来る様だ。

「本当に人懐っこいね、この子は。本当はちゃんと飼って上げられた方が、この子にとっても良いのだけど……」

そんな事を何となく考えているうちに、他の猫達が餌を食べ尽くしていた。

「そういえば、今夜は珍しく雪が降るかも知れないって天気予報で言っていたから、明日は来れるかどうか分からないけど、みんな元気にしててね」

おばさんはいつもの様に皿を回収すると、それを合図とするかの様に猫達は三々五々次の餌場に散っていったが、やはり茶トラだけがおばさんの足元でじゃれ付いている。

「さ、あんたも次の餌場へお行き」

名残惜しそうに鳴き声を上げる茶トラを残して、おばさんもその場を立ち去った。

その日、昨日の女子高生は姿を見せなかった。

昼間から重苦しく垂れ込めていた厚い雲が太陽の光を遮って薄暗かったが、日が落ちて辺りが真っ暗になり、ぽつん、ぽつんと街頭の灯りが燈り出す頃になると、体の芯から凍りつきそうな冷たい風が、行く手にあるあらゆる熱を奪っていく。

そして、日付が変わる頃になると、今シーズンの初雪がちらちらと舞い始めた。

茶トラは植え込みの奥の方で小さく丸まっていた。

まるで、ここにさえいれば、きっといつか誰かが迎えに来てくれるのを確信しているかのように、茶トラはいつもの植え込みに紛れていた。

いつしか、駅のターミナルも一面の雪に覆われていた。

雪の勢いは衰える気配がない。

(了)

HP【Blankfolder】

<http://blankfolder.huuryuu.com/>

<http://blankfolder.blog.shinobi.jp/>

Copyright(C) 2006-2007【Blankfolder】こりん, All Rights Reserved.

本ファイルの二次配布はご遠慮下さい。

本作品へのお問い合わせは上記 HP にて受け付けております。

本作品に対するご意見、ご感想は上記 Blog でもお受けしております。